さくらまち

192号
2020年3月1日

カトリック小金井教会ニュース

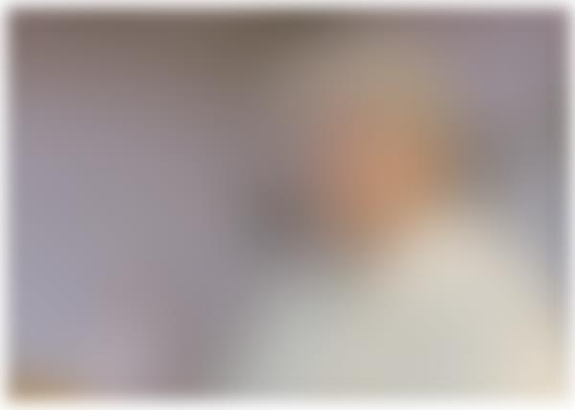
司祭のことば
司祭紹介…田村師
「馬小屋」について
クリスマスおめでとうございます
飼い葉桶から十字架へ
ご存知ですか？
教会ニュース＆信徒異動
クローズアップニュース

「灰の水曜日」にもちいる灰は、昨年の受難の主日で祝福された枝を燃やして作られる。
灰は象徴として回心、悔い改めを表わし、その灰をつくる火は、清め、浄化、また光の象徴となります。

死者からの影響（復活祭を前に）

加藤豊

この記事は、ホームページにも載せました。「さくらまち」の発行時期と、今この文を書いている時期とでは、いうまでもなくタイムラグがあります。



主の奉献、2020年２月２日（日）

「死」と「復活」は、信仰の中心となるテーマ

とはいえ11月中は「死者の月」、そして「死」と「復活」とは、わたしたちの信仰の中心となるテーマです。

この文の着想は2019年の11月、次号の発刊は「復活祭」号のようになるでしょうから、タイムラグどころかテーマとしてはリアルタイムなタイミングとなりました。

あまり個人的な話はしたくないのですが、体験にもとづかない教話でないと、なかなか血のかよったものとはなりにくいと思いますので、今回は自分の経験を話します。

母の死

その意味で今、みずからのことをふりかえるならば、数年前に亡くなった母の死のことが即座に浮かんでまいります。

わたしは、まことに親不孝な息子でありましたが、母自身はどのような人であったかといえば、生前、元気な頃は、いつもわたしとぶつかってばかりでした。

わたしとだけならまだしも、親戚中から身内の「和」を乱すトラブルメーカーとしてうとんじられていました。

そもそも、こんな紹介は母にとって不名誉なもので、それをかまわず書いてしまうわたしは、今でも十分親不孝者ですが、事実は事実です。

母との会話

実際、感情的でたえず気分にムラがあった母が、真正面から息子のいうことに耳を傾けてくれたのはわたしが司祭になった後からです。

その傾向が顕著になってきたのは、死を間近にした数か月前からのことでした。

これはもうどんなにあがいても仕方のないことですからね。隠しきれない人柄が表われ、いえなかった本音が明かされます。

つまり人と人とが、真面目に冷静にまともに会話ができるようになるわけです。

そしておたがいに気づかされるのです。はじめからこうしておけばよかったと。

死者は生きている

じつはこの記事を書く数日前、先輩司祭と夕食をご一緒したのですが、そこでの話題はやはり、亡くなった司祭たちのことでした。

しかし、亡くなったとはいえ、それでもなお、現役の司祭団になんらかの形で、今でも影響をあたえつづけています。

誤解をおそれずにいえば、いやがうえにも（つまり、好むと好まざるとにかかわらずといいましょうか？）、亡くなった司祭たちはわたしたち司祭団のあいだで生きているのです。

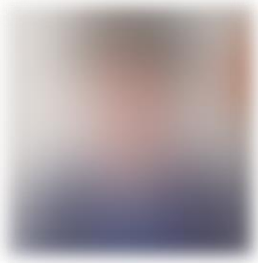
生きている人たちとともに

この季節、わたしたちはたんに祭日、主日をお祝いするだけにとどまらず、今もわたしたちのあいだで生きている人たちとともに過ごせれば、それは生きているわたしたちにも、亡くなった方々にも幸いなことではないでしょうか？

（小金井教会主任司祭）

召命について

サレジオ会 田村寛神父



田村師、2019年 12月1日(日)

山梨の甲府教会で、幼児洗礼を受けました。

５人兄弟の３番目で、２番目の年子の兄も、サレジオ会の司祭です。父が厳格な人だったので（今は穏やかですが)、当時は正直なところ家から出たいという気持ちがありました。

ガエタノ・コンプリ神父が、キリストの聖骸布（せいがいふ）の話をするために甲府教会へ来た時に、サレジオ会の野尻湖聖書学校のチラシを持ってきていたのが、召命のひとつのきっかけだったかもしれません。

サレジオ会の野尻湖のキャンプに兄が参加し、小神学校に入りました。

わたしは侍者会のつながりから、当時横浜にあった教区の小神学校に見学に行く予定になっていましたが、たまたまそのとき都合が悪くなって行けなかったのです。その結果、当時川崎の鷺沼にあったサレジオ会の小神学校に見学に行き、入ることになりました。その頃は、中学一年生から高校三年生まで約50人の小神学生がいました。同級生はのべ16、 7人いたと思います。ちなみに現在、わたしもふくめてサレジオ会司祭が３名、イエズス会司祭が１名、さいたま教区司祭が１名です。高校卒業後９名が、調布のサレジオ会神学院に入りました。

司祭叙階後、小平では当初東京サレジオ学園の児童指導員をしていましたが、2007年から2013年の７年間は 大分県のサレジオ会の児童養護施設にも行っていました。2018年からはサレジオ学園の園長をしています。兄は 現在、調布神学院で養成の担当で院長をしています。

小金井教会は、サレジオ学園からもっとも近い教会なので、これからもいろいろなお手伝いができればと思っています。

「馬小屋」について

加藤豊

典礼暦年の上では四旬節を迎えていますが、ちょっと季節はずれの「馬小屋のセット」（プレセピオ）の話をしたいと思います。

四旬節の「十字架の道行」は、じつは季節に限定されるのもではないのに対し、待降節に飾られる「馬小屋」は飾られたり、かたづけられたりする季節のオブジェです。こうした比較について、「そもそも『十字架の道行き』は信心業で、『馬小屋』はただの飾りじゃないか」と思われる方も当然いらっしゃることでしょう。

しかしこのどちらもが、もともとフランシスコ会による信仰の視聴覚教育のために考案されたことを考えるなら、かたや季節限定、かたや日常的に設けられた宗教上のすぐれた演出である点での比較は一考の価値ありです。

「十字架の道行き」は信心業とはいえ、崇敬の対象として定着し、その前で祈る人の姿をよく見かけるのに対して、「馬小屋」はともすれば「クリスマスツリー」や「アドヴェントクランツ」と同列にみられ、馬小屋の前でお祈りをする人の姿はあまり見られないように感じます。

さて、話を「馬小屋」に限定しましょう。ツリーやクランツが季節の演出ですから、いうまでもなく季節がすぎればかたづけられるわけで、同じように「馬小屋」もかたづけられてしまいます。「馬小屋」は、慣例としては「主の公現後の土曜日」まで出していたはずなのですが、今は「主の公現」の日曜日（主日）のミサが終わったら即座に馬小屋をかたづける教会もあります。

こうした季節の表現と物理的な設置（解体）のための人数の問題などもあって、まさに微妙な事柄が多々あります。これもまたその一つです。

似たようなことはアドヴェントクランツにもいえます。クランツは待降節第一主日から飾られますが、これもオプションです。はっきりいって典礼的な重要性はありません。ただ「主の降誕が近づいている」ということを視覚的に表現するにはいいアイデアです。

伝統的な形の４本の蝋燭を立てたものの場合、降誕祭当日は撤去されるのことが多いのですが、４本目が点火される待降節第四主日のミサがすべて終わると撤去してしまう教会もあります。しかし、その翌日も待降節中なんですよね（12月24日が土日でないかぎり)。ですから、これもまた24日に係の人がちょっと早く教会に来てか たづけをする、というのが理想です。

2000年以上続いてしまったカトリック教会ですから、オプションであるものについてこだわりつづけても時間を浪費するだけです。しかしながら、そのオプションは現代でももちいられ、季節のシンボルとなって毎年わたしたちの前に現われるのですから、たまにはその由来や意味に心を向けてみてはいかがでしょうか？

（カトリック小金井教会主任司祭）

クリスマス
すべての人の光

待降節…アドヴェント・クランツ

待降節には毎週「主を待ち望むアドヴェント」を歌いながら、１本ずつアドヴェントクランツに火が灯されました。

第三主日はガウデーテ（喜び）の主日とよばれ、バラ色のろうそくがもちいられました。

夜空に輝く教会のイルミネーション

待降節…ゆるしの秘跡

12 月 1 日（日）と 15 日（日）に「ゆるしの秘跡の日」が設けられ、油谷神父さま、竹内神父さまがいらしてくださいました。

今回は、告解室の中で「勧め」「悔い改めの祈り」「ゆるしの宣言」がおこなわれ、「償い」は聖体拝領後に共同体の中で果たし、祈り合いながら心を新たにして、降誕祭を迎える準備をすることができました。

クリスマスミサ、12月24日、午後６時

降誕祭のミサ

降誕祭は、12 月 24 日（火）の 18 時と 20 時に夜半のミサ、25 日（水）の６時半に早朝のミサ、14 時に日中のミサがおこなわれました。今年は 24 日が平日のためか、20時のミサも出席が多かったようです。

入祭の歌「やみに住む民は光を見た」が流れる中、神父さまによって馬小屋に寝かされる幼子イエス、そして献香、降誕祭の夜半のミサが始まりました。

クリスマス聖歌の響く聖堂は、神が地上につかわされたひとり子イエス・キリストの誕生を祝う喜びで満ちあふれました。

クリスマスプレゼント

ミサ後に教会からのクリスマスプレゼントが、玄関前でひとりひとりに手渡されました。

きょうわたしたちの心に灯された光が、愛の光、希望の光となって、いつまでも輝きつづけますように。

馬小屋の祝福

教会からのクリスマス プレゼント

ベツレヘムとゴルゴタ 飼い葉桶と十字架

待降節中、わたしたちは、祈り、悔い改め、喜びに満ちた期待、そして主の降誕の神秘を黙想することによって、救い主イエス・キリストの来臨にそなえるよう求められます。

貧困における主の受肉を思いめぐらし、わたしたちは信仰の中で成長し、神さまへの愛を深め、とくに神さまに対する大きな感謝に導かれます。

四旬節中、わたしたち洗礼を受けた者は、洗礼志願者とともに心を合わせ、悔い改め、祈り、断食、施しにつとめ、ふさわしい姿で主のもっとも重要なみわざの祭儀を迎えるよう求められます。

キリストはわたしたちを贖い、過越の神秘によって成就され、ご自分の死をもってわたしたちの死を打ち砕き、復活をもってわたしたちに命をおあたえになりました。

わたしたちはキリストの受難と十字架をとおして、復活の栄光に達することができるよう、神さまの恵みを祈り求めます。

主の受難は主の受肉から、十字架の道行は飼い葉桶から始まる

救い主イエス・キリストの降誕をとりまくすべての出来事はわたしたちに、クリスマスと聖金曜日、ベツレヘムとゴルゴタ、飼い葉桶と十字架がどれほど密接に結びついているかを示しています。

言いかえれば、ゴルゴタはベツレヘムで始まり、十字架の道行は飼い葉桶から始まるということです。

主の受難は、オリーブ山（主が捕えられる前に最後の祈りを捧げた場所）での主の受難から十字架での死までの、過越しの聖なる三日間にかぎられません。もっとも広い意味では、主の受難は主の受肉から始まります。

創造主の御子である救い主イエス・キリストは無限な謙遜をもって世に来られました。

「人の子は、仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである」（マルコ 10・45）。たしかに、主は最初から、マリアの胎内に宿られたときから、そのことを示されました。

困窮状態のなかで、主がお生まれになるまともな場所すらなかったことが、主の十字架の道行の始まりなのではないでしょうか。

飼い葉桶と十字架、主の降誕と聖金曜日

ベツレヘムの馬小舎は、ゴルゴタの丘にあたるような場所ではないでしょうか。主は木でできた飼い葉桶でお生まれになり、十字架の木で亡くなられました。

ルカ福音書では、主の降誕は聖金曜日を予表することが示されています。ルカは主の誕生場面について、マリアは聖なる幼子を「包み」、飼い葉桶に「寝かせた」（ルカ 2・7 参照）と、とても短く書いています。

ルカは後に別の場面に、この 2 つの動詞をふたたび使っています。聖金曜日に、イエスの遺体が亜麻布で「包まれ」、墓の中に「置かれました」（ルカ 23・53 参照）。この 2 つの場面のみに、この同じ 2 つの動詞（原語のギリシア語による）が使われています。

主の受肉がもたらす究極の結果

主イエス・キリストの誕生と死、飼い葉桶と十字架は、分かちがたく結びついています。神さまは人間としてわたしたちのために死ぬために、人間になりました。神さまは世に対する愛によって、ゴルゴタで命をささげるためにベツレヘムにお生まれになりました。飼い葉桶と十字架は、わたしたちにとって神さまの愛の啓示です。

神さまはわたしたちをとても愛されたから、飼い葉桶に横たわる幼子になることに尻ごみしませんでした。神さまは世をとても愛されたから、十字架で死ぬことにも尻ごみしませんでした。

キリストの受肉がもたらす究極の結果は、主の受難と十字架での死です。ベツレヘムの究極の結果はゴルゴタです。そして、神さまの愛の究極の結果はわたしたちの贖いです！ （GT）

ご存知ですか？
「聖書の40という数の意義」

典礼暦年（教会カレンダー）では、灰の水曜日をもって四旬節に入ります。四旬節は「40 日の期間」という意味ですが、灰の水曜日は、実際には復活祭の 46 日前です。それは、わたしたちが毎週の主日（日曜日）のミサでキリストの復活を祝っており、期間中の 6 日間の 主日に断食をしない習慣だったからです。

聖書では、40 という数は象徴的で、別の期間への移行、新しい生活、新しい成長、変化、ある重大な課業から別の重大な課業への移り変わりなどを意味する、重要な期間を表します。たとえば、

・大洪水の間、雨は 40 日間降っていました（創 7･12 参照）。
・モーセの生涯は 40 年ひと区切りに三期に分かれています。成長して大人になり、エジプトから逃れ、そしてエジプトからイスラエルの民を導き出すために戻ってきました（使 7･23、30、36 参照）。
・モーセは神の律法を受ける準備をするために 40 日間断食をしました（申 9･9 参照）。
・モーセは 3 回もシナイ山で 40 日間を過ごした（申 9･11、25、10･10 参照）。
・イスラエルの民は 40 年にわたって荒れ野をさまよいました。この期間の年数は、新しい世代が生まれるのにかかる時間を表します（民 32･13）。
・数人のイスラエルの指導者と王は、40 年間、つまり一世代にわたって支配してきたと言われています。 たとえば、エリ（サム上 4･18)、サウル（使 13･21)、ダビデ（サム下 5･4)、およびソロモン（王上 11･42）がふくまれます。
・預言者エリヤは神の山ホレブにたどり着くまで、40 日間歩き、断食していた（王上 19・8）。
・主イエスは公生涯の準備のために、荒れ野で 40 日間断食をしました（マタイ 4･2、マルコ 1･13、ルカ 4･2）。
・主イエスは、死からの栄光の復活の 40 日後に天国に昇りました（使 1･3）。

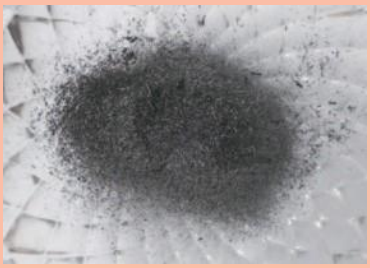
聖書の中で時間を示すために使用される 40 という数字を見た時、わたしたちは何か象徴的な意味をもつ何かによって注意を喚起させられます。悔い改め、新しさ、準備、自省、変化、課業の成就、束縛や奴隷からの脱出、霊的栄養と成長などを思い起こさせます。

教会は 40 日間の四旬節を、断食、祈り、自制、善行によって主にならい、それによって復活祭を迎えることができるようわたしたちの心の準備をさせるために設けているのです。「教会は、毎年、四旬節の 40 日間を通して、荒れ野でのイエスの神秘に心を合わせます。」（カトリック教会のカテキズム 540 番）。 （GT）

教会カレンダー 2月～5月

●四旬節

2月26日（水） 灰の水曜日
ミサ6：30/19：00



灰

3月1日（日） 四旬節第一主日
洗礼志願式
3月22日（日） 四旬節第四主日
黙想会 講話
ミサ前後、告解の時間
4月5日（日） 受難（枝）の主日
10時ミサ 修道院玄関前から
4月9日（木） 聖木曜日ミサ19：00
4月10日（金） 聖金曜日
主の受難の祭儀 19：00

●復活節

4月11日（土） 聖土曜日
復活徹夜祭 ミサ19：00
4月12日（日） 復活の主日
洗礼式 復活祭のお祝い
4月19日（日） 復活節第二主日
神のいつくしみの主日
転入者、洗礼者説明会
5月3日（日） 復活節第四主日
世界召命祈願日
5月24日（日） 主の昇天
5月31日（日） 聖霊降臨の主日
教区合同堅信式

教会学校クリスマス会、12月22日（日）

新年の集い、「ふれあい」、1月1日（日）

新成人の祝福とお祝い

2020年1月12日（日）10時のミサの中で、4名の新成人への祝福がおこなわれ、ミサ後にヨハネ館地下ホールでお祝いの茶話会が開かれました。

新成人を祝福するかのような明るい陽光のなか、各自からは20歳を迎えた感想や抱負、将来めざしている職業などの自己紹介があり、加藤神父さまからはげましのお言葉をいただきました。

すべての青年たちが、神さまのお恵みに満たされて、自分の行くべき道を探し求めることができますようにお祈りしたいと思います。

新成人の祝福、1月12日（日）

新成人の祝福、お祝いの茶話会、1月12日（日）

◆編集後記◆

「灰の水曜日」にもちいる灰は教会で作りますが、今回の表紙にその写真を掲載したいと話し合い、撮影しました。枝を燃やしたときの炎と枝と煙が、思った以上に良く撮れたような気がします。いかがでしょうか。

灰の水曜日からはじまる四旬節が、復活祭を迎えるわたしたちにとって、ふさわしい期間となりますように。（S）

◆ミサの時間◆

＊主日のミサ　日曜日　午前7時
午前10時

＊週日のミサ　月曜日～土曜日　午前6時30分

カトリック小金井教会　〒184-0005 東京都小金井市桜町1-2-20 tel 042-384-5793 fax 042-384-6592